

◆久松久子 選 ～句集『ひとり』瀬戸内寂聴～

米寿も過ぎ、同級生の中で一番長生きになってしまった。最近、「一人」という言葉がとても重く響く。この一人を表題にした瀬戸内寂聴氏の句集『ひとり』より、いくつかの俳句をご紹介します。

平成二十七年、NHK全国俳句大会に応募した「白靴のすつくと立ちて席譲る」の句が、黒田杏子先生の選に入った。黒田先生はいつも素敵な古布のもんぺをお召しになっているが、そのスタイルにお似合いになるのではないかと思います、手作りの小袋を同封して礼状を出した。私は、屑繭を最後まで紡ぐ結城紬の里で生まれ育った為か古い絹を捨てられず、常日頃から小袋などを作っては身近な人に使ってもらっている。

そのことがきっかけで、黒田先生から「袋のお久さん」と呼んでいただき、お手紙のやりとりをさせていただくようになった。そして、昨年十一月九日に九十九歳で逝去された、ご友人の寂聴氏のお話を伺うことができた。

黒田先生は、寂聴氏が五十一歳で得度されて間もない頃より、写経をしたり法話を聴くために寂聴氏の庵を訪れている。また、句会を開催してはとのお誘いに、杏子のお名前から名付けられた「あんず句会」も立ち上げておられる。お二方とも東京女子大のご出身であり、寂聴氏の故郷は徳島で、杏子氏も徳島に疎開されていたという共通点も楽しく聴かせていただいた。私の祖母も、明治の頃の東京女学校、今の東京女子大に通っていたので、より一層ご縁を感じていた。

そんなある日、テレビで冬の嵯峨野の外での説法の様子を拝見した時、御頭が寒々しく、さぞや庵でもお寒かろうとに思い、大事に取っておいた絞り織の白絹でマフラーをこさえ、杏子氏を通じて差し上げた。その折に賜ったのが、九十五歳で出版された句集「ひとり」であった。これまで小説はたくさん執筆しておられるが、俳句はこれまで発表されたことがなく、しかも自費出版であったことには驚いた。大作家でいらっしゃるのに謙虚な御姿勢は、句集の帯に

あった一遍上人の「生ぜしもひとりなり。死するもひとりなり」に通ずるものを感じる。

百歳を目前にしながらい身罷られたことはとても残念で寂しいが、改めてこの句集を開いてみると、今迄に聞いたことのない法話や仏教の言葉に出会う。まだまだ学ぶことがあると教えてくださる一冊である。また、年齢に負けず、驕らず、しっかり「ひとり」を生きる元気を持ちなさいと励ましていただいているようにも感じる。

紅葉燃ゆ旅立つ朝の空や寂

凡人なら真赤な紅葉に勇み足だろうが、「空や寂」で正反対の思いがある。最期を飾る紅葉がかえって寂しい。植物は紅葉して最期を飾るところに仏の教えを見られたのかもしれない。

雲水の花野ふみゆく嗟峨野かな

あとがきにあったように寂聴氏は雲水に加わり行脚された。草履を履き笠を目深に被った御姿が目浮かぶ。

小さき破戒ゆるされてゐる柚子湯かな

「小さき破戒」とは、仏門を忘れ一時的に普通の人間に戻った時の思いだったのか行いだったのか。

生ぜしも死するもひとり柚子湯かな

ここにも一遍上人の言葉がある。孤独の意味を考えながらの柚子湯であったのだろう。

子を捨てしわれに母の日喪のごとく

後年和解し、葬儀にも参列いただいたそうだが、当時三歳の子どもを置いて家を出たことは、生涯忘れられない苦悩。

雛飾る手の数珠しばしはづしおき

お子さんは女の子だったから、雛を飾る時には思い出さずにはいられなかっただろう。心の葛藤がみえるようである。

寂庵に誰のひとすぢ木の葉髪

一本の髪の毛に懐かしさを感じられたのだろう。ふと俗世にいた頃を思い出されたかもしれない。

仮の世の修羅書きすすむ霜夜かな

修行の身でありながら俗世の小説を書いている。ふとこれでいいのかと疑問を持つこともあつただろう。季語の「霜夜」が効いている。

独りとはかくもすがしき雪こんこん

「雪こんこん」が、子どもにかえったようで楽しい。寂聴氏のおおらかさ、明るさが素直に出ている一句である。

おんやま御山のひとりに深き花の闇

御山と格調をもって打ち出し、中七の「ひとり」に覚悟の程が見える。下五の「花の闇」は絢爛と輝くものを秘めた晩年とも読める。寂聴氏の最期を飾る名句である。